「信巻」三一問答の背景について

本願寺派　安方哲爾

序

宗祖親鸞聖人（以下、宗祖と略称）は『教行信証』「信巻」に、

問。如来本願已発至心信楽欲生誓、何以故論主言一心也。答。愚鈍衆生解了為令易弥陀如来雖発三心、涅槃真因唯以信心、是故論主合三為一歟。

（『真聖全』二―五九）

問ふ。如来の本願已に至心信楽欲生の誓を発したまへり、何を以の故に論主一心と言ふ也。答。愚鈍の衆生解了易ら令んが為に弥陀如来三心を発したまふと雖も、涅槃の真因は唯信心を以てす、是の故に論主三を合して一と為せる歟。

と、『大経』の三心と天親の『浄土論』の「一心」を対望させ、この一心こそが往生成仏の真因であるとされる。ここでは『浄土論』の一心の語が出されてあるが、三一問答の中身は『論』を中心にして釈をなされているわけではない。それでは宗祖の「三一問答」の背景は何か。それは善導の「散善義」三心釈が背景となっていると窺える。特に三心釈を承けて元祖法然聖人（以下、元祖と略称）が『選択集』三心章に独自の釈をなされている。

また『往生礼讃』の三心釈には、

具此三心必得生也。若少一心即不得生。　（『真聖全』一―六四九）

此の三心を具して必ず生を得る也。若し一心少けぬれば即ち生を得ず。

とあり、この「一心少けぬれば」という語は浄土願生者にとってはまことに厳しい言葉であったであろう。とくに至誠心の扱いについては元祖の上に種々の解釈が見られる。（三、元祖の「至誠心釈」において述べる）宗祖はこの語を釈して『唯信鈔文意』に、

「若少一心」といふは、若はもしといふ、ごとしといふ、少はかくるといふ、すくなしといふ、一心かけぬればむまるゝものなしとなり。一心かくるといふは信心のかくるなり、信心かくるといふは本願真実の三信心のかくるなり。『観経』の三心をえてのちに『大経』の三信心をうるを一心をうるとはいふなり。このゆへに『大経』の三信心をえざるをば一心かくるといふなり。この一心かけぬれば実報土にむまれずとなり。

（『真聖全』二―六三四）

といわれている。この『大経』と『観経』の三心を対望し、また元祖の三心釈を分析することによって宗祖の三心一心の釈の背景を窺ってみたい。

一、「必可具足三心」の釈

『選択集』「三心章」には「念仏行者、必可具足三心之文」（『真聖全』一―九五七）（念仏の行者、必ず三心を具足す可き之文）という語が標章の文として掲げられている。この「必ず三心を具足すべき」とはどういう意味であろうか。「念仏の行者には自ずから三心が具足している」という意味であろうか、また「念仏を行じていても、三

心を具さなければ往生できない」と言う意味であろうか。

『和語灯録』「諸人伝説の詞」に、

善導本願の文を釈し給ふに、至心信楽欲生我国の安心を略し給ふ事、なに心かあるや。答えての給はく、衆生称念必得往生としりぬれば、自然に三心を具足するゆへに、このことはりをあらはさんがために略し給へる也。

（『真聖全』四―六七六）

たゞし三心ぞ四修ぞなんど申事の候は、みな南無阿弥陀仏は決定して往生するぞとおもふうちにおさまれり。

（『真聖全』四―六七九）

上人おほせられていはく、今度の生に念仏して来迎にあづからんうれしさよとおもひて、踊躍歓喜の心のおこりたらん人は、自然に三心は具足したりとしるべし。念仏申ながら後世をなげく程の人は、三心不具の人也。もし歓喜する心いまだおこらずば、漸漸によろこびならふべし。又念仏の相続せられん人は、われ三心具したりとしるべし。

（『真聖全』四―六八一）

とある。特に二番目の文はその中身が『一枚起請文』[1]と一致している。この釈の中心は、

た、往生極楽のためニハ南無阿弥陀仏と申て　疑なく往生スルソト思とりテ申外ニハ別ノ子さい候はす

（『浄土真宗聖典』原典版一三六一）

とあり、三心に当たるものとしては「疑なく往生スルソト思とりテ」の部分であり、これは善導の深心釈の「無疑無慮、乗彼願力、定得往生」（『真聖全』一―五三四）を承けられたものであろう。

これらの『和語灯録』の語は、「念仏の行者には自ずから三心が具足している」という意味にとれる文章である。しかしながら後に元祖の三心釈の中で述べるように、「念仏を行じていても、三心を具さなければ往生できない」という意味に窺える文章もある。

二、『大経』の三心と『観経』の三心

元祖には『大経』の三心の釈はきわめて少ない。『選択集』「二門章」（『真聖全』一―九二九）の最初に『安楽集』を引用されている。「偏依善導一師」（『真聖全』一―九九〇）といわれる元祖が最初に道綽の『安楽集』の聖浄二門判をひかれ、仏道には聖道門と浄土門という二つの流れがあり、この選択本願の念仏の宗旨は浄土門であり、聖道門とは立場を異にすることを顕される。そのなかで、

是故『大経』云。若有衆生、縦令一生造悪、臨命終時、十念相続、称我名字、若不生者、不取正覚。（『真聖全』一―九二九）

是故に『大経』に云く。若し衆生有りて、縦令ひ一生悪を造れども、命終の時に臨みて、十念相続して、我が名字を称せんに、若し生れず者、正覚を取らじ。

と本願加減の文を引用されている。この本願加減の文は『大経』十八願文と『観経』下々品の文を合致させたものであるが、『大経』の部分は「わが名字を称せんに、もし生れずば、正覚を取らじ」という文である。この文も「乃至十念」の意を取られてあり、三心に対する語はない。

いま、『安楽集』で『大経』にのたまわくとされながら、『観経』下々品の語を合致させたのかは、僧朗師の『選択集戊寅記』（『真宗叢書』六―六三三）に、

一、前義を証せんがための故なり。

二、鸞師を相承するが故なり。

三、両経の本意を顕わさんと欲するが故なり。

とある。前義を証せんがためとは『安楽集』の聖浄二門判において二由一証を出される、その「理深解微」を証せんがためである。すなわち劣機往生の旨を明かす。鸞師を相承すとは『論註』の八番問答[2]を承けている。両経の本意を顕すとは、『大経』には「十方衆生」とあって、悪機が現れない。『観経』の称名は隠顕がかかるので、両経を合して両経の本意が顕れるのである。

『大経』の三心に対する元祖の立場は一貫している。『選択集』「本願章」においても、まず『大経』三心の文（『真聖全』一―九四〇）は出されるが、そのあと『観念法門』と『往生礼讃』の本願加減の文を出される。

『観念法門』には、

若我成仏、十方衆生、願生我国、称我名字、下至十声、乗我願力、若不生者、不取正覚。

（『真聖全』一―九四〇）

若し我成仏せんに、十方の衆生、我が国に生ぜんと願じて、我が名字を称せんこと、下十声に至るまで、我が願力に乗じて、若し生れず者、正覚を取らじ。

とあり、『往生礼讃』には、

若我成仏、十方衆生、称我名号、下至十声、若不生者、不取正覚。（『同』）若し我成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称せんこと、下十声に至るまで、若し生せず者、正覚を取らじ。

とある。善導の本願加減の文には『観経』下々品の語はひかれていない。『観念法門』は願生（欲生）のみが出され、『往生礼讃』では三心が略されている。この善導の釈を元祖は承けられたのであろう。

いま、元祖が「本願章」で十八願文を出されるのに三心の釈がないのは、元祖の十八願観は「念仏往生義」であり、諸行に対し、行々相対して念仏一行で顕されるためである。

わずかに『大経』の三心についての釈は、『漢語灯録』観経釈に、

凡三心通万行故、善導和尚釈此三心、以正行・雑行二行。今此経三心、即開本願三心。爾故、至心者至誠心也、信楽者深心、欲生我国者回向発願心也。

（『真聖全』四―三三五一）

凡そ三心は万行に通ずる故に、善導和尚此の三心を釈すに、正行・雑行の二行を以てす。今ま此の経の三心は、即ち本願の三心を開く。爾る故は、至心と者至誠心也、信楽と者深心なり、欲生我国と者回向発願心也。

とあり、『大経』の三心と『観経』の三心が一つであることを顕される。つまり、元祖が三心を顕されるときは必ず『観経』の三心をもちいられてある。(3)

『大経』の「至心信楽欲生」と『観経』の「至誠心深心回向発願心」の関係であるが、『観経』の三心は念仏・諸善に通摂する名目であり、『大経』の三心は念仏に局る名目である。

至誠心は浄影『観経疏』には「一者誠心誠謂実也起行不虚実心求去故曰誠心」（『浄全』五―一九二）とあり、天台『観経疏』には「至之言専誠之言実」（『浄全』五―二一五）とある。

深心は浄影『同』には「二者深心信楽慇至欲生彼国」とあり、天台『同』には「深者仏果深高以心往求故云深心亦従深理生亦従厚楽善根生」とある。

回向発願心は浄影『同』には「三者廻向発願之心直爾趣求説之為願挾善趣求説為回向」とある。天台『同』には回向発願心の釈は無い。

回向の名義は『大乗義章』（『大正』四四―六三六下）に「回向不同。一門説三一菩提回向。二衆生回向。三実際回向」とあり、今は菩提回向の意である。

すなわち「至誠心深心回向発願心」は自ら真実心を発し、慇至・深高の心をもって、仏果に対して自の善を回向する心である。この三心は念仏に局ったものではない。諸行にも通ずる。また聖道門にも通ずる三心である。

これに対して『大経』の「至心信楽欲生」は浄土教の名目である。もともとこの「至心信楽欲生」を三心とみる

ことが出来るのは『観経』の三心に対望するからであり、「至心」は「心を至して」と訓ずれば「真実心」の意はない。「欲生」は「浄土に生まれたいと欲する心」であり、浄土教に局る名目である。

宗祖は「化巻」に、

依釈家之意、按『無量寿仏観経』者、有顕彰隠蜜義。言顕者、即顕定散諸善、開三輩・三心。然二善・三福、非報土真因。諸機三心、自利各別而非利他一心。（『真聖全』二―一四七）

釈家之意に依て、『無量寿仏観経』を按ずれ者、顕彰隠蜜の義有り。顕と言者、即定散諸善を顕し、三輩・三心を開く。然に二善・三福は、報土の真因に非ず。諸機の三心は、自利各別にして利他の一心に非ず。

と『観経』の三心に隠顕を見られる。顕説の義では自力の三心であり、各別の心である。

今問題としたいのは、「欲生」の語である。「欲生」は「浄土を願生する」という意であるが、この語を『観経』の「回向発願心」と対望したときに「欲生」に「回向」の義、即ち「利他」「衆生回向」の義が含まれてくる。実際、善導の「散善義」にも、

又言「回向」者、生彼国已、還起大悲、回入生死教化衆生、亦名「回向」也。（『真聖全』一―五四一）

又「回向」と言ふ者、彼の国に生じ已りて、還て大悲を起して、生死に回入して衆生を教化する、亦「回向」と名くる也。

と、還相回向の釈が出されている。『大乗義章』に出される回向の名義のなか、菩提回向のみではなく衆生回向の意が含まれることとなる。宗祖が「信巻」欲生釈で、

次言欲生者、則是如来招喚諸有群生之勅命。（『真聖全』二―六五）

次に欲生と言者、則是如来諸有の群生を招喚したまふ之勅命なり。

と欲生を約仏で語られ、

是故如来矜哀一切苦悩群生海、行菩薩行時、三業所修、乃至一念一刹那、回向心為首得成就大悲心故。

（『真聖全』二―六六）

是の故に如来一切苦悩の群生海を矜哀して、菩薩の行を行まいし時、三業の所修、乃至一念一刹那も、回向の心を首と為して大悲心を成就ことを得たまへるが故に。

と、如来の大悲心が欲生の体であり、

欲生即是回向心、斯則大悲心故、疑蓋無雑。

（『真聖全』二―六六）

欲生即是回向心なり、斯れ則ち大悲心なるが故に、疑蓋雑こと無し。

と、衆生の上の欲生に、仏の大悲心すなわち利他の徳が備わっていることを顕わされたのは、この『大経』の欲生と『観経』の回向発願心の関係からであろう。

三、元祖の「至誠心釈」

元祖は『大経』の十八願文を「念仏往生の願」と見られ、「乃至十念」のところで語られる。しかるに『観経』に「具三心者必生彼国」（『真聖全』一―六〇）とあり、『往生礼讃』に「若少一心即不得生」（『真聖全』一―六四九）とあり、三心が無ければ往生出来ないとある。しかもその三心の内容が至心では、

一者至誠心、所謂身業礼拝彼仏、口業讃歎称揚彼仏、意業専念観察彼仏。凡起三業必須真実故名至誠心。

（『真聖全』一―六四八・九）

一には至誠心、所謂身業に彼の仏を礼拝す、口業に彼の仏を讃歎し称揚す、意業に彼の仏を専念し観察す。凡そ三業を起すに必ず真実を須ひるが故に至誠心と名く。

となっている。この訓点は『真聖全』であるが、本来は「凡そ三業を起さば必ず須く真実なるべし」（『浄土真宗聖典』七祖篇七三六）と読むのが『往生礼讃』の当面であろう。三業そろえて真実であることが至誠心であるならば、煩悩具足の凡夫には到底かなわぬことである。このことをふまえて元祖は独自の釈をなされてある。

まず第一に『選択集』「三心章」に、

明知、一少是更不可。因茲欲生極楽之人、全可具足三心也。（『真聖全』一―九六六）

明かに知んぬ、一少けぬれば是更に不可なり。茲に因て極楽に生れんと欲はん之人は、全く三心を具足す可し也。

とあり、至誠心の釈としては、

至誠心者是真実心也。其相如彼文。但外現賢善精進相内懐虚仮者、外者対内之辞也、謂外相与内心不調之意。（『真聖全』一―九六六・七）

至誠心とは是真実心也。其の相彼の文の如し。但し外に賢善精進の相を現じ内に虚仮を懐くといふは、外とは内に対する之辞也、謂く外相と内心と調は不る之意なり。

とされている。これは外相と内心との調和を以って真実心であるとし、外相と内心の不調を以って虚偽の心とする釈である。便宜上、数字をいれてのべる。

（1）即是外智、内愚也。賢者対愚之辞也、謂外是賢、内即愚也。善者対悪之辞也、謂外是善、内即悪也。精進者対懈怠之辞也、謂外示精進相、内即懐懈怠心也。

（2）若夫翻外蓄内者、祇応備出要。

内懐虚仮等者、内者対外之辞也。謂内心与外相不調之意。

（3）即是内虚、外実也。虚者対実之辞也。謂内虚、外実者也。仮者対真之辞也。謂内仮、外真也。

（4）若夫翻内播外者、亦可足出要。　（『真聖全』一―九六七）

（1）即ち是外は智、内は愚也。賢とは愚に対する之辞也、謂く外は是賢、内は即ち愚也。善とは悪に対する之辞也、謂外は是善、内は即ち悪也。精進とは懈怠に対する之辞也、謂く外には精進の相を示し、内には即ち懈怠の心を懐く也。

（2）若し夫れ外を翻して内に蓄へば、祇に応に出要に備へつべし。内に虚仮を懐く等とは、内とは外に対する之辞也。謂く内心と外相と調は不る之意なり。

（3）即ち是内は虚、外は実也。虚とは実に対する之辞也。謂く内は虚、外は実なる者也。仮とは真に対する之辞也。謂く内は仮、外は真也。

（4）若し夫れ内を翻して外に播さば、亦出要に足んぬ可し。

とある。ここで（1）と（3）は外が賢であり実であり、内が愚であり虚である。これは内外が不調であり虚仮の相である。

これに対し、（2）は外は賢であり、内も賢である。また（4）は外は愚（虚）であり内も愚（虚）である。善人は善人のまま、悪人は悪人のまますくわれていくというのが念仏の教えである。すなわち、凡夫は凡夫のまま外に賢善精進の相を現ぜず、内外相応の相を示すのが至誠心とされる。

元祖の至誠心の釈は『漢語灯録』（『真聖全』四―三五三）にも見られるが内容は同意である。この「外に賢善精進の相を現ぜず」という態度は『一枚起請文』の上にも見える。

念仏ヲ信セン人ハ　たとひ一代ノ法ヲ能々学ストモ　一文不知ノ愚とんの身ニナシテ尼入道ノ無ちノともからニ同しテ　ちしやノふるまいヲせすして　只一かうに念仏すへし　（『浄土真宗聖典』原典版一三六一）

の語は、至誠心の釈として窺いたい。

また、『和語灯録』「七箇条起請文」には、

真実といふはもろもろの虚仮の心のなきをいふ也。虚仮といふは、貪瞋等の煩悩をおこして正念をうしなふを虚仮心と釈する也。すべてもろ〳〵の煩悩のおこる事は、みなもと貪瞋を母として出生するなり。貪といふについて喜足小欲の貪あり、不喜足大欲の貪あり。いま浄土宗に制するところは、不喜足大欲の貪煩悩也。まづ行者かやうの道理を心えて念仏すべき也。これが真実の念仏にてある也。喜足小欲の貪はくるしからず。（中略）まず生死をいとひ、浄土をねがひて、往生を大事といとなみて、もろ〳〵の家業を事とせざれば、痴煩悩なき也。少々の痴は往生のさわりにはならず、これほど心えつれば、貪瞋等の虚仮の心はうせて、真実心はやすくおこる也。これを浄土の菩提心といふなり。詮ずるところ、生死の報をかろしめ、念仏の一行をはげむがゆへに、真実心とはいふ也。

（『真聖全』四―六〇二）

とあり、煩悩を喜足小欲の貪と不喜足大欲の貪とに分別されてある。いま浄土宗で往生の障りとなるのは不喜足大欲の貪であり、「生死をいとひ、浄土をねがひて、往生を大事」とするこころの無き貪である。これに対し、念仏の一行をはげみながらの喜足小欲の貪は往生の障りとならないとされる。

この二つの釈は真実心といっても、ともに凡夫相応の真実心である。ここには元祖の苦心の後が窺える。「散善義」の至誠心の釈を種々の解釈によって凡夫相応の真実心として理解しようとされてある。

鎮西義ではこの二つの釈をもって至誠心とされる。杉紫朗師の『西鎮教義概論』の鎮西義の三心釈に『浄土宗行者用意問答』[4]を引用して、

至誠心とは真実の心と云ふことなり、凡そ人の心に真あり偽あり、君臣夫婦みな其心あるが如く、往生を欣ふ心までもこの二つあり、その偽れるを虚仮心と名づく、内は名利の心に住しながら外に往生を願ふ由をもてなして三業精進の人よと云はるゝを虚仮心と云ふなり、此人は往生すべからざるなり、実あるをば至誠心と名づ

く、内外相応ひて三業の勤め外を飾らず、真実に往生の為めと思ふを至誠心と云ふなり　（九五）

とある。

しかし、この真実心ではたして成仏の因となりえるであろうか。『御伝鈔』（上）第七段に元祖と宗祖の信心一異の問答が出されてある。

大師聖人まさしく仰られて云、信心のかはるとまうすは、自力の信にとりてのことなり、すなはち智慧各別なるゆへに、信また各別なり、他力の信心は、善悪の凡夫ともに仏のかたよりたまはる信心なれば、源空が信心も善信房の信心も、さらにかはるべからず、たゞひとつなり。（『真聖全』三―一六四五・六）

とあり、ここに「智慧各別・信各別」の語がある「化巻」には、

二種三心者、一者定三心、二者散三心。定散心者、即自利各別心也。（『真聖全』二―一五四）

二種の三心と者、一者定の三心、二者散三心なり。定散の心者、即自利各別の心也。

とあり、「各別の心」とは自力の心である。この各別には二つの意味があり、一つは「三心各別」という意味である。「化巻」に、「諸機三心、自利各別而非利他一心」（『真聖全』二―一四七）（諸機の三心は、自利各別にして利他の一心に非ず。）とある。第二に「所機各別」という意味である。『愚禿鈔』に、

窃按『観経』三心往生者、是則諸機自力各別之三心也。（『真聖全』二―四七八）

窃に『観経』の三心往生を按ずれ者、是れ則ち諸機自力各別之三心也。

とある。もし、至誠心が凡夫相応の真実心であるとするならば、この「三心各別・諸機各別」となるのではないか。しかしながら、元祖にはもう一つの至誠心の釈がある。「三心料簡事」には至誠心の真実について、

然則今此至誠心中所嫌之虚仮行者、余善諸行也。三業精進雖勤、内貪瞋邪偽等血毒雑故、名雑毒之善、名雑毒之行、云往生不可也。（中略）次所選取之真実者、本願功徳即正行念仏也。是以玄義分云。（中略）是以今文正

由彼阿弥陀仏因中行菩薩行時、乃至一念一刹那三業所修、皆是真実心中作云々。由阿弥陀仏因中真実心中、作行悪不雑之善故云真実也。其義以何得知。次釈、凡所施為趣求亦皆真実文。此以真実施者、施何者云、深心二種釈第一罪悪生死凡夫云施此衆生也。造悪之凡夫即可由此真実之機也。（『法全』四四八・九）

然則今此至誠心の中嫌う所之虚仮の行と者、余善諸行也。三業に精進勤と雖も、内に貪瞋邪偽等の血毒雑わる故に、雑毒之善と名く、雑毒之行と名て、往生不可と云也。（中略）次選取所之真実と者、本願の功徳即正行念仏也。是以玄義分云。（中略）是以今文に正く彼阿弥陀仏因中に菩薩行を行時、乃至一念一刹那も三業修所、皆是れ真実心の中に作すに由べし云々。阿弥陀仏因中真実心中、作行こそ悪雑はらざる之善なるが故真実と云うに由べし也。其義何を以て知るを得。次の釈、凡そ施為趣求所亦皆真実文。此の真実を以て施と者、何者に施す云へは、深心の二種の釈第一罪悪生死凡夫と云へる此衆生に施也。造悪之凡夫即此真実に由可き之機也。

とある。この「三心料簡事」は冒頭に、「先浄土悪雑善永以不可生知」（『同』四四八）（先づ浄土には悪の雑わる善は永以生べからず知るべし）とあり、先の『漢語灯録』『和語灯録』の凡夫相応の真実心とは違う扱いをされてある。そして真実とは本願の功徳・正行念仏であるとされ、その真実心を施す相手として深心釈の機の深信が出されてある。

元祖のうえに如来の真実心をもちいると言う考えは『選択集』「本願章」の勝易の二徳にでている。余行に対し念仏の勝の徳として、

勝劣者、念仏是勝、余行是劣。所以者何。名号者是万徳之所帰也。然則弥陀一仏所有四智・三身・十力・四無畏等一切内証功徳、相好・光明・説法・利生等一切外用功徳、皆悉摂在阿弥陀仏名号之中。故名号功徳、最為勝也。（『真聖全』一一九四三・四）

勝劣とは、念仏は是勝、余行は是劣なり。所以は何ん。名号は是万徳之帰する所也。然れば則ち弥陀一仏の所

有四智・三身・十力・四無畏等の一切の内証の功徳、相好・光明・説法・利生等の一切の外用の功徳、皆悉く阿弥陀仏の名号之中に摂在す。故に名号の功徳、最も勝れたりと為す也。

と、名号に弥陀仏の智慧・慈悲が摂在されていることは説かれている。

宗祖は「散善義」の至誠心釈の文の「須」を「すべからく～すべし」と読まず、「もちいる」と読まれ、[5] また「施以趣求」を「施したもうところ、趣求をなす」と読まれ、[6] 至誠心とは如来の真実心を凡夫が信受するからこそ衆生の上に真実心があると見られた。それは元祖の上にもその考えがあったように窺える。ただ、このたびの小論では論の立て方からして、前義の「至誠心とは凡夫相応の真実心」という所に絞って進めたい。

因みに法然門下で至誠心を「如来の真実心をもちいる」と同義にされたのは隆寛である。『具三心義』に、

以凡夫心不為真実以弥陀願為真実　帰真実願之心故約所帰之願名真実心　（『隆寛律師の浄土教附遺文集』四）

凡夫心をもって真実と為すにはあらず弥陀の願をもって真実と為す　真実の願に帰するの心が故に所帰の願に約して真実心と名づく

とあり、また『極楽浄土宗義』には、

指弥陀本願名為真実　帰真実願之心故随所帰願以能帰心以真実心也　（『同』二一）

弥陀の本願を指して名て真実と為す　真実願に帰する之心なるが故に所帰の願に随がって能帰の心を以て真実心と為するなり

とある。隆寛は如来の真実心に帰する衆生の能帰の心をもって、真実心とされている。[7]

四、元祖の「深心釈」「回向発願心釈」

元祖の深心の釈としては『選択集』に、

次深心者、謂深信之心。当知、生死之家以疑為所止、涅槃之城以信為能入。故今建立二種信心、決定九品往生者也。

（『真聖全』一―九六七）

次に深心とは、謂く深信之心なり。当に知るべし、生死之家には疑を以て所止と為し、涅槃之城には信を以て能入と為す。故に今二種の信心を建立して、九品の往生を決定する者也。

と信疑決判の文が出される。『漢語録灯』（『真聖全』四―三五三）も同意である。『和語灯録』「七箇条起請文」には、

二に深心といふは、ふかく念仏を信ずる心なり。ふかく念仏を信ずといふは、余行なく一向に念仏になる也。もし余行をかぬれば、深心かけたる行者といふ也。詮ずるところ、釈迦の浄土三部経は、ひとへに念仏の一行をとくと心え、弥陀の四十八願は、称名の一行を本願とすと心えて、ふた心なく念仏するを、深心具足といふなり。

（『真聖全』四―六〇二・三）

とあり、余行を交えず、念仏一行を「念仏往生」と信じるを深心とされている。

またこの三心の関係は、『和語灯録』の観経釈に、

三心といは、一には至誠心、二には深心、三には回向発願心なり。三心はまち〳〵にわかれたりといへども、要をとり詮をえらんでこれをいえば、深心におさめたり。

（『真聖全』四―五五五）

と深心に摂めてある。それは宗祖の言われる三心即一の心というよりは、先に述べた『一枚起請文』の立場、

たゝ往生極楽のためニハ南無阿弥陀仏と申て　疑なく往生スルソト思とりテ申外ニハ別の子さい候はす

（『浄土真宗聖典』原典版一三六一）

の「疑なく往生スルソト思ひとりテ」の深信であろう。

また、元祖の回向発願心の釈はまず『選択集』には、「回向発願心之義、不可俟別釈。」（『真聖全』一―九六七）（回向発願心之義、別の釈を俟つ可からず。）とあり、『漢語灯録』（『真聖全』四―三五三）も同意である。『和語灯録』（『真聖全』四―五六一）には、

回向発願心といは、人ごとに具しつべき事なり。国土の快楽をきゝてたれかねがはざらんや。そも〳〵かの国土に九品の差別あり。われらはいづれの品をか期すべき。善導和尚の御心は「極楽弥陀は報仏報土也。未断惑の凡夫すべてむまるべからずといへども、弥陀の別願不思議にて、罪悪生死の凡夫、一念・十念してむまる」と釈し給へり。（中略）願力によてむまればなんぞ上品にすゝまん事をかたしとせん。惣じては弥陀浄土をまうけ給事は願力の成就するゆえなり。

（『真聖全』四―五六一）

とあり、「人ごとに具しつべき」の語が見える。[8] また『和語灯録』「七箇条起請文」には、

三に回向発願心といふは、無始よりこのかたの所作のもろ〳〵の善根を、ひとへに往生極楽といのる也。又つねに退する事なく念仏するを、回向発願心といふなり。

（『真聖全』四―六〇三）

とあり、これは衆生の回向心、菩提回向である。元祖の三心釈を概観すれば凡夫の発す凡夫相応の三心であり、総じていえば、「念仏往生」と深信することである。ただ、「三心料簡事」には、

回向発願心始、真実深信中回向云事、此三心中、回向云心也。去過今生諸善者、三心已前功徳取返極楽回向云也。全三心後非云行諸善也。

（『法全』四四九）

回向発願心の始に、真実深信中回向云事、此は三心の中、回向云心也。去過今生諸善者、三心已前の功徳を取

返して極楽に回向せよと云也。全三心の後に諸善を行ずと云に非ず也。

とあり、三心已前の功徳は極楽に回向するが、三心已後は「諸善を行ずと云に非ず」とされる。

『選択集』の「別の義を俟つべからず」とはいかなる意味であろうか。「二行章」には五番の相対として、

第四不回向回向対者、修正助二行者、縦令別不用回向、自然成往生業。（中略）次回向者、修雑行者、必用回向之時、成往生之因。若不用回向之時、不成往生之因。（『真聖全』一―九三七・八）

第四に不回向回向対といふは、正助二行を修するは、縦令ひ別に回向を用ひざれども、自然に往生の業と成る。（中略）次に回向といふは、雑行を修する者は、必ず回向を用ふる之時、往生之因と成る。若し回向を用ひざる之時は、往生之因と成らず。

と不回向の義がとかれ、雑行は回向を用いるが、正行は回向を用いないことが示される。この文を承けて宗祖は「行巻」に、「非凡聖自力之行、故名不回向之行也」（『真聖全』二―三三）（凡聖自力之行に非ず、故に不回向之行と名る也）と釈されている。

先の『漢語灯録』「観経釈」の、

凡三心通万行故、善導和尚釈此三心、以正行・雑行二行。（『真聖全』四―三五二）

凡そ三心は万行に通ずる故に、善導和尚は此の三心を釈するに、正行・雑行の二行を以てす。

という文によれば、「三心は万行に通ず」とある。「別の義を俟つべからず」とは、通途の回向と同じという意味ともとれるが、「二行章」の意によれば、雑行は回向を用いるが念仏は回向を用いざれども往生の業となる、という意味にも窺える。

結

宗祖は「信巻」三心一心問答において『大経』の三心が信楽の一心に摂まるとされている。その内容を分別すると、

（1）弥陀の名号法を衆生が信受するのは機上においては信楽一心である。……一心正因

（2）その名号の中身は如来の智慧心と慈悲心であり、それを衆生が領受することで往生成仏の因となる。……約仏の三心

（3）それは衆生の上に置いては仏智を頂戴した真実心が満入していることであり、衆生の上には無疑の信相となってあらわれ、浄土を期する欲生心となる。……約生の三心

の三つである。

元祖は浄土宗を独立された。それは「念仏一行」こそが往生の因であり、それは法蔵菩薩が念仏一行を選択されたからであるとされる。しかしそれは弥陀の浄土に往生すると言う法門であるが、直ちに成仏の法門であるとは言い難い。もし、弥陀の浄土に往生した後、彼の土でまた六波羅蜜を行じてその後成仏するとするならば、それでは念仏はやはり手段になるであろう。聖道門からの批判を受けた元祖のあと、念仏一行が往生成仏の因であると言うことを明らかにする責任が宗祖にはあった。この「念仏一行」は「一心正因」の仏道であり、その一心は大菩提心である事を明らかにされようとした。(9)

宗祖はそのことを三一問答の法義釈で説明される。「散善義」の文を用いて三心を約仏・約生に配当し、仏心を衆生が領受するのが信心であると示される。それは『論』・『論註』の指南による。(10)『論』にとかれる五念門行を宗

祖は願生行者の五念門行ではなく、法蔵菩薩の五念門行とされた。『入出二門偈』に「願力成就名五念」（『真聖全』二―四八二）と示されている。「三一問答」でその名号願力を領受した衆生の上に如来の自利・利他の徳が満足していることを明らかにされた。

元祖は三心釈、特に至誠心釈では苦心をされ、凡夫相応の三心釈をされている。元祖は念仏一つで往生する法門を明らかにされた。宗祖は、何故念仏一つで往生成仏するのかを元祖が苦心をされた三心釈の所に『論』・『論註』の釈を通して念仏の真実性を示されたのであろう。

それでは元祖の三心釈をどのように見るか、と言うことであるが、元祖の三心釈はあくまで凡夫相応の三心であり、宗祖が説かれるような成仏の因たる三心は説かれていない。それはまだ元祖の釈は真仮未分であり、宗祖において、仏の本意（本願力回向の大行）が明らかになるという考えもある。また元祖の釈には仏回向の三心という表現は無いが、当然義としてはあり、それを宗祖が継承されたとも窺える。

いずれにしても、この「具此三心必得生也。若少一心即不得生」（『往生礼讃』『真聖全』一―六四九）の文に対し、三心即一の信楽こそが往生成仏の因であり、そこには自利・利他の徳が備わっていることを明らかにされたのが親鸞聖人の「三心一心問答」である。

註（1）『一枚起請文』は元祖最晩年のものであり、その奥書に、

浄土宗ノ安心起行此一紙ニ至極セリ　源空カ所存此外ニ全ク別義を存セス　滅後ノ邪義ヲふせかんカ為メニ所存を記し畢　建暦二年正月二十三日　（『浄土真宗聖典』原典版一三六一）

とあるから、元祖の結論としての領解を述べられたものである。

（2）『論註』八番問答（『真聖全』一―三〇七～三一一）において、『大』・『観』二経の所被の機の違いについては第一・第二問答、「謗法不生」は第三・四・五問答で説かれる。

(3) ただ、経典そのものを見ると、『大経』の三心と『観経』の三心とは説かれ方は同じではない。『観経』の三心は韋提希夫人に対して釈尊が説かれたものであるが、『大経』の三心は法蔵菩薩が世自在王仏の前で発願されたものである。すなわち「私はこのような仏となりて、衆生を救いたい」と法蔵菩薩が誓われたものである。

(4) 浄土宗鎮西派二祖、良忠師著。

(5) 『真聖全』二―五一、「信巻」で「必須真実心中作」を「必ず真実心の中に作したまへるを須いる」と訓まれている。

(6) 『同』五二、「信巻」で「凡所施為趣求」を「凡そ施したまふ所趣求を為す」と訓まれている。

(7) ただ、この釈が宗祖の至誠心釈と同じかというと、そうではない。この違い目を梯實圓師は、

親鸞聖人は至心を如来の真実心とし、その真実心を疑いなく信受する心を信楽といわれたのに対して、隆寛律師は如来の真実心に帰する心を至誠心というといい、衆生の能帰の心として至誠心を語ることである。

(『行信学報』通刊第一一号一八)

と指摘されている。

(8) ただし、元祖には浄土に九品の差別を見ない表現もある。『西方指南抄』「十一箇条問答」に、

問、極楽に九品の差別の候事は、阿弥陀仏のかまへたまへることにて候やらむ。答、極楽の九品は弥陀の本願にあらず、四十八願の中になし、これは釈尊の巧言なり。善人・悪人一処にむまるといはゞ、悪業のものども、慢心をおこすべきがゆへに、品位差別をあらせて、善人は上品にすゝみ、悪人は下品にくだるなりと、ときたまふなり。いそぎまいりてみるべし云々。

(『真聖全』四―二一四)

とある。

(9) 「信巻」菩提心釈(『真聖全』二―六九)に、

横超者、斯乃願力回向之信楽、是曰願作仏心。願作仏心即是横大菩提心、是名横超金剛心也。

横超者、斯れ乃ち願力回向之信楽、是を願作仏心と曰う。願作仏心即是横の大菩提心なり、是を横超の金剛心と名る也。

とある。

(10) 直接『論』・『論註』に釈があるのではない。

『論』においては「一心」(『真聖全』一―二六九)を以って五念門の行を行ずる。自利利他円満して「妙楽勝真

心」（『同』二七六）を成ずる。これが大菩提心である。

『論註』においては「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」は「阿弥陀如来為増上縁」とあり、三願的証の文が出される（『真聖全』一―三四七）。

これを承けて宗祖は『入出二門偈』に「願力成就名五念」と示される。